

## 観音物語 (8) 悪人に追われる

わくひあくにん ちく だらくこんごうせん ねん び かののんりき ふ のうそんいち も  
 或被悪人逐 墮落金剛山 念彼観音力 不能損一毛

或は悪人に逐われて 金剛山より墮落せんにも 彼の観音の力を念ずれば 一毛を損すること能わず

須弥山は八つの峰に囲まれた霊山である。その山容は威厳があり、遠方から眺める雄姿は人々の心を魅了してやまない。しかし、須弥山には登れない。なぜならば、須弥山と連峰のあいだは深い谷があり、真っ青な水で満たされ、水底では熔岩が燃えたり、水蒸気が昇っているからである。ボコ、ボコ、ボコ…、ぶきみな低い音を響かせながら褐色の泡が水面でおどっている。

須弥山を取り囲む八つの連峰のなかでもひとときわ高い山は金剛山である。青い水面に美しい山容が逆さになって沈んでいる。金剛山は多くの登山者を魅了してやまない観音霊場でもある。

「ろっこん、しょうじょう」

「ろっこん、しょうじょう」

霊峰金剛山は、お互いに「六根清浄」と声を掛けあいながら登る習わしがある。しかし、心がけが悪ければ登ることはできない。なぜならば、登っている途中で、過去の罪障が脳裏によみがえってくるからである。暗い想念のまま登れば、その思いが鮮明に現れてきて、気が狂ってしまう。暗い心で乱れたならば、お経を唱え、他人に懺悔して許しを乞えば狂いは治るといふ。悪人には恐い山である。

悪人に追われて金剛山の頂上に登りつめた夫人がいる。長い黒髪が美しい女性である。「たとえ金剛山から落ちたとしても一本の毛も損なわれない」と『観音経』で説かれている。それを信じて彼女は上がるようにして登ってきた。夫人は岩陰に身を寄せて観音経を一心に読んでいる。眼下の断崖から熔岩の不気味な低い音が伝わってくる。風向きによって熔岩の熱風がときどき頬を撫でる。いつまでもここにおられる場所ではない。ときどきブルッと身震いが全身を走る。しかし、彼女の読経はゆっくりとした沈着な声である。

「世尊妙相具 我今重問彼 仏子何因縁 名為観世音 具足妙相尊 偈答無尽意 汝聴観音行 善応諸方所 弘誓深如海 歴劫不思議 侍多千億仏 発大清浄願 我為汝略説 聞名及見身……」

「ああ…、主人が登ってくれば私は殺される」

夫人の読経は真剣である。

金剛山を登っている途中で、頭を抱え込んで倒れている赤シャツの男がいる。

「どうしたの？」

「いや、なんでもないよ」

「でも、顔が真っ青だよ」

道端の赤シャツは、口をつぐんでうつむいたままだである。額から汗が玉になって噴き出ている。

「どうしたの？ 大丈夫？」

赤シャツは急に立ちあがって叫んだ。

「許してくれ！ 許してくれ！ 許してくれーッ！」

泣き叫びながら、転がるようにして坂道を下って行った……。

八名の登山者は茫然と立ちすくんで、道から消えていく赤シャツの後ろ姿を眺めている。

「な、なにが…、なにがあったんだろう？」

この意味を知る者は誰もいない。ただ、赤シャツ本人のみが知ることである。

金剛山の頂上で黒髪の夫人がひとり、観音経をゆっくりと読み続けている。そこへ八名が登ってきた。研ぎ澄まされた読経の声にただならぬ気配を感じる。彼女の異様な雰囲気には八名は釘づけにさせられた。

八名が茫然と立ちつくしていると、谷底から赤い煙が急に吹きあげてきた。噴煙は、あの赤シャツの男が狂って坂道を下っていく姿のように登山者たちには見えた。夫人の長い黒髪は、風にそよがれ、手を振っているようである。夫人の頭上で赤い煙は渦を巻きながらしばらく漂っていたが、やがて消えていった。

奇怪な現象を目撃した八名は夫人に手を合わせ、一緒に観音経を唱和する。

「聞名及見身 心念不空過 能滅諸有苦 仮使興害意 推落大火坑 念彼観音力 火坑變成池 或在須弥峰 為人所推墮 念彼観音力 如日虚空住 或被悪人逐 墮落金剛山 念彼観音力 不能損一毛…」